

学生による新設学部への期待と実感： Importance-Performance Analysis を用いて

行實 鉄平¹⁾・浦上 萌^{2),3)}・奥野 真由¹⁾・大橋 充典¹⁾・
野田 耕¹⁾・秦 佳江²⁾

本研究は、人間健康学部の第1期学生を対象に、入学時における新設学部への「期待」と入学後に学生生活を過ごす中で感じている「実感」とのギャップを Importance-Performance Analysis を用いて分析し、新設学部が掲げる「文医融合」教育の実現にむけた暫定的な課題の抽出を試みた。入学動機をベースとした期待および実感を把握する各項目（20項目）を作成し測定した結果、期待と実感ともに高い項目は8項目と多くの項目を確認できた一方で、期待は高いが実感は低い項目が2項目確認できた。また、期待は低いが実感は高い項目が3項目確認できた一方で、期待と実感ともに低い項目は7項目と多くの項目を確認できた。学部コンセプトである「文医融合」教育の実現に向けては、第1期学生を対象としたことから、継続的な調査の必要性、つまり、学科別で専門性に応じた取り組みを経ての再検証が今後の課題として認識できた。

キーワード：新設学部、第1期学生、Importance-Performance Analysis、「文医融合」

Expectation and actual feeling to the new department by a student: Using importance-performance analysis

Tepei YUKIZANE, Moe URAGAMI, Mayu OKUNO, Mitsunori OHHASHI,
Koh NODA, and Kae HATA

背景

我が国の少子化現象は、大学における進学率の上昇および全入時代の到来を牽引している。平成30年度学校基本調査（文部科学省、2018）によれば、各校種の在学者数は幼稚園（120万8千人で前年度比－9万8千人）、小学校（642万8千人で前年度比－2万1千人）、中学校（325万2千人で前年比－8万2千人）、高等学校（323万6千人で前年比－4万5千人）と軒並み減少となっている。一方、大学の在籍者数は、290万9千人で前年比＋1万8千人と増加しており、高等学校からの進学率は53.3%で過去最高を更新しているという。しかしながら、中央教育審議会大学分科会将来構想部会の「今後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理」（2017）によれば、①第4次産業革命、Society 5.0と言われる大きな産業構造、社会構造の変化に対応する教育研究の革新が求められていること、②専門職大学制度の創設に象徴されるように実践的な職業教育の充実への期待が高まって

1) 久留米大学人間健康学部スポーツ医科学科
2) 久留米大学人間健康学部総合子ども学科
3) 現職）椋山女学園大学人間関係学部心理学科

いること、③学士課程への進学率が上昇し続ける中で学位が保証する教育のレベルについて国民の共通理解がないこと、④18歳人口の大幅な減少が予想されている中で四年制大学の数が増加し続け一方で定員割れの大学が増加していること、⑤国際競争が激しくなる中で世界の研究ネットワークの中での日本のポジションが低下していることなど、今や高等教育機関である大学は、検討すべき構造的な課題が山積しているという。このような時節を踏まえると、各大学は、国立・私立を問わず、どのような学生に、どのような教育を行い、どのような人材を育てていくのか、自らの存在意義を示すミッションの再定義とともに、その成果を様々な方法で「見える化」していく努力が課せられているといっても過言ではない。

そんな中、2017年度、久留米大学は、総合子ども学科とスポーツ医科学科の2学科から成る人間健康学部を新規開設した。本学部は、「文医融合」というコンセプトを掲げ、文系学部でありながら、医学部との連携による独自のカリキュラムを設定し、学生が幅広い知識と技術を学習できる環境を構築することで保育や体育・スポーツ領野における専門性の高い人材の育成を目指している。また、本学部では、「新設学部における教育評価システムの構築～『文医融合』の学習環境の実質化に向けて～」という教育研究プロジェクト（学部PJ）を立ち上げ、本学部が掲げるミッションの成果を「見える化」していく長期的な研究体制を敷くこととなった。この学部PJの最初の取り組みは、学生の入学動機に関する調査研究であった。この入学動機の把握は、学業成績との関連（測上、1984）や、大学生生活の学習態度や適応との関係性（後藤、2003）など、学業に対する向き合い方や大学生としての成長、大学生生活の充実度等に関連している（古市、1993）ことを勘案した場合、意義ある取り組みであると考え。しかしながら、その入学動機は、学校種別や学部学科の専門性により異なることが想定されることから、本学部の専門性を勘案した内容の把握が必要となる。また、入学後における動機の変容を横断的に捉えていくことで、学部ミッションの成果検証が可能になると考える。

翻って、Importance-Performance Analysis（IPA）は、企業組織における市場開拓戦略の提示や実践のために開発されたマーケティング技術（Martilla & Jarnes, 1977）であるが、現在では、「ツーリズム（tourism）」（Azzopardi & Nash, 2013；Coghlan, 2012；Dwyer, Knezevic Celbar, Edwards, & Mihalic, 2012）や「フードサービス（food services）」（Tontini & Silveira, 2007）、「教育（education）」（Nale, Rauch, Wathen, & Barr, 2000；O'Neil & Palmer, 2004）、「ヘルスケア（healthcare）」（Abalo, Varela, & Manzano, 2007）、「銀行（banking）」（Joseph, Allbright, Stone, Sekhon, & Tinson, 2005；Yeo, 2003）、「行政（public administration）」（Van Ryzin & Immerwahr, 2007）、「電子商取引（e-business）」（Levenburg & Magal, 2005）、「IT（information technologies）」（Skok, Kophamel, & Richardson, 2001）など、様々な事業や領域において、いわゆる、営利－非営利に関わらず、その利用範囲の広がりが見られる。山下（2005）は、顧客の製品・サービス属性に対する事前の期待水準（Importance）とその属性のパフォーマンス評価（performance）の高低によって、顧客満足度を「①不満足空間（期待高－パフォーマンス低）」、「②満足空間（期待高－パフォーマンス高）」、「③潜在的な不満足空間（期待低－パフォーマンス低）」、「④潜在的な満足空間（期待低－パフォーマンス高）」といった4つの空間区分に分類した「顧客満足ポートフォリオ」をIPAの戦略フレームとして紹介している。また、IPAは、単純であるが、基本的なマーケティング戦略の策定には有効であり、多くの領域においてコンセンサスが得られている測定方法および戦略フレームであることを示している。

本研究では、学生の入学動機をベースとした期待内容と入学後の実感内容との差異を評価する、

つまり、IPAの測定手法と戦略フレームを援用した分析を行うことで、学部ミッションの実現にむけた暫定的な課題を抽出できるのではないかと考えた。

目 的

そこで本研究では、学生による新設学部への期待と実感をIPAという分析ツールを用いて行い、学部コンセプトである「文医融合」教育の実現にむけた課題を展望することを目的とした。具体的には、人間健康学部の第1期学生を対象に、入学時における新設学部への「期待」と入学後に学生生活を過ごす中で感じている「実感」のギャップをIPAの測定手法および戦略フレームを用いて学科別に分析し、今後の「文医融合」教育における暫定的な課題の抽出を試みた。

方 法

対象

人間健康学部の第1期生140名(総合子ども学科54名:男子16名,女子38名,スポーツ医科学科86名:男子55名,女子31名)を対象とした。ちなみに、総合子ども学科では、保育・幼児教育をはじめ、医学・心理学・社会学・福祉学等の幅広い専門領域から総合的に「子ども」を学ぶことができる特徴がある。また、幼稚園教諭一種免許状や保育士資格が取得できる。一方、スポーツ医科学科では、人間の発達段階に沿ったからだの仕組みを体系的に学び、ライフステージ全体にわたる医学的・科学的な専門知識、スポーツ・運動における支援の技術を学ぶことができる特徴がある。また、中学校及び高等学校教諭一種免許状(保健体育)やアスレティックトレーナー受験資格等も得られるカリキュラムを用意している。

調査項目の作成

まず、「進路決定方略」(栗山ほか, 2001)や「進学動機」(松田ほか, 2014)、「大学への入学動機」(中村・薊, 2016)に関する調査において開発された調査項目を参考に、本学部入学者にあわせた大学進学動機も加えた33項目を入学動機項目として作成した。具体的には、自分の興味関心や教養を身に付けることを志向する「得意分野・自己形成」の4項目、大学生活を楽しむことを志向する「エンジョイ・自己形成」の5項目、特に目的や動機がない「無目的」の6項目、学歴等が含まれる「社会的地位」の7項目、就職したい職業に関係する資格免許や専門性に関わる「資格・専門」の3項目、自分自身の学力に関わる「偏差値との適合」の3項目、そして、本学部の特徴である医学部との連携や地域に根差した教育に魅力を感じているというような「本学の独自性」の5項目に関する項目を作成した。

次に、入学前の期待と入学後の実感との差を分析するため、上記の入学動機33項目の中から期待内容に関連する項目(20項目)を精選した。そして、期待と実感を測定するために質問文の末尾を「～するため」(期待測定の場合)と「～できそうだ、～できている」(実感測定の場合)といったようなワーディングを用いた2種類の質問文を作成した。なお、各項目は、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までのリッカート型5段階尺度評定を用いて測定し、その数量化にあたってはそれぞれ1～5までの得点を与え、その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で、各インディ

データの平均点等を算出することで各種分析を進めた。

調査の実施

2017年7月に講義の冒頭で無記名方式により一斉に実施した。質問紙回答前に、著者より調査の趣旨、プライバシーの保護とデータの保管方法、自由参加で不利益防止の配慮等に関する倫理的配慮の説明を行った。その結果、133名（総合子ども学科51名：男子14名、女子37名、スポーツ医科学科82名：男子51名、女子31名）の回答を得ることができた。

また、今後継続的に調査を行う予定であるため、各時点のデータをマッチングするために携帯電話の下4桁の番号を記述してもらうよう教示し、これにより個人が特定されることはないことを説明したうえで承諾を得られた学生に回答してもらった。なお、本研究は久留米大学御井学舎倫理委員会による審査を受け、承認を得た上で実施されている。

分析の方法

本研究では、山下（2005）が製品・サービスの満足・不満足構造をIPAの戦略フレームとして示した「カスタマー満足ポートフォリオ」を援用し、入学前の期待と入学後の実感の各20項目の平均値を、X軸（実感水準）とY軸（期待水準）にプロットしていき、2軸の平均値により区切られた4つの空間領域に分布される項目間の関係を学部全体および各学科別で分析していくことで、今後の「文医融合」教育における課題の考察を進めていくこととした。

Figure 1は、新設学部に対する学生の満足・不満足構造を分析していく戦略フレームを示したものである。本戦略フレームにプロットされた各項目は、4つの空間領域において以下のような対応を基本的には検討することになる。第1に、期待が高く実感が低い「I. 不満足空間」にプロットさ

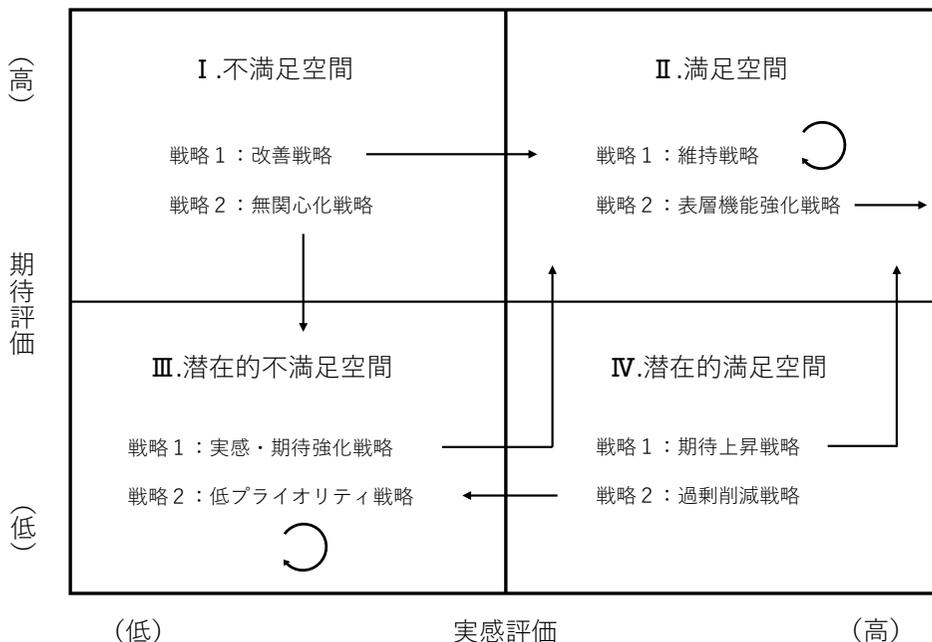


Figure 1 学生による新学部への評価の分析フレーム

山下（2005）を修正

れた項目は、実感の上昇を図る改善戦略か、逆に、学生の期待水準を低める無関心化戦略を検討することになる。第2に、すでに十分な期待と実感の評価が満たされている「Ⅱ. 満足空間」にプロットされた項目は、維持戦略が基本路線であるが、より一層の満足化を推進するためには学生サービスなどの充実を図る表層的機能強化戦略を検討することになる。第3に、期待水準と実感評価がともに低い「Ⅲ. 潜在的不足空間」にプロットされた項目は、実感の強化を図り、その後期待ないしは関心度を高めるといふ実感・期待強化戦略を取ることにもできるが、この空間はもともと学生の関心が低いので、その優先順位を下げる低プライオリティ戦略を検討することも可能であると考えられる。第4に、学生満足が得られていながらあまり期待されていない「Ⅳ. 潜在的満足空間」にプロットされた項目は、学生の期待水準を上昇させ、顕在的満足を得てもらおう期待上昇化戦略が基本的な方向性となる。しかし、学生の関心や競争優位性を得にくい内容が多々ある場合は、実感を下げる過剰削減戦略を検討することも考えられる。本研究では、このようなIPAの戦略フレームを用いて、各項目のプロット状況による考察を進めていく。

結 果

学部全体

Table 1は、入学動機を基にした学生の新設学部への期待と実感の各項目の平均点等を示したものである。

まず、期待項目に関しては、「資格を取るため」(4.54ポイント)、「専門的な知識や技術を身につ

Table 1 学生の期待—実感内容 (全体)

プロット番号	期待項目	M	SD	実感項目	M	SD
①	1. 就職後、多くの収入・給与を得るため	2.98	1.08	21. 就職後、多くの収入・給与を得ることができそう	3.02	0.81
②	3. 文系と医系の連携である「文医融合」の学部で魅力を感じたため	3.61	1.24	2. 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている	3.62	1.08
③	5. 人生の視野を広げるため	3.84	1.01	11. 人生の視野を広げられている	3.93	0.83
④	6. 社会に通用する肩書きが必要のため	3.05	1.17	15. 社会に通用する肩書きが得られそう	3.09	0.81
⑤	7. 自分に合った職業を探すため	3.91	1.07	12. 自分に合った職業を見つけられそう	4.12	0.76
⑥	8. 高い社会的地位を得るため	2.63	1.07	6. 高い社会的地位を得ることができそう	2.86	0.94
⑦	13. 資格を取るため	4.54	0.67	19. 希望している資格がとれそう	4.18	0.76
⑧	15. 知的好奇心を満たすため	3.39	1.07	5. 知的好奇心が満たされている	3.66	0.91
⑨	17. 医学部があり、医学的な知識も学べるため	3.50	1.37	14. 医学部があり、医学的な知識を学べている	3.74	0.95
⑩	19. 就職に有利なため	2.83	1.10	10. 就職に有利になりそう	3.31	0.81
⑪	20. 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べるため	3.21	1.15	8. 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べている	3.54	0.97
⑫	22. 同じように目的を持った友人を得るため	3.25	1.24	7. 同じような目的を持った友人を得ることができている	4.30	0.79
⑬	24. 就職後、より高い役職に就くため	3.03	1.12	17. 就職後、より高い役職に就くことができそう	3.08	0.77
⑭	25. 自分の才能を伸ばすため	3.64	1.00	1. 自分の才能を伸ばすことができている	3.57	0.77
⑮	26. 地域に根差した教育方針に魅力を感じたため	2.95	1.10	22. 地域に根差した教育に魅力を感じている	2.93	0.84
⑯	27. 幅広い教養を身につけるため	3.74	1.02	13. 幅広い教養を身につけられている	3.86	0.84
⑰	28. 得意とすることを追求するため	3.76	0.95	20. 得意とすることを追求できている	3.88	0.82
⑱	29. 興味のある分野を深く掘り下げるため	4.25	0.75	18. 興味のある分野を深く掘り下げられている	4.17	0.75
⑲	30. 専門的な知識や技術を身につけるため	4.38	0.66	3. 専門的な知識や技術を身につけられている	4.07	0.77
⑳	33. 青春をエンジョイするため	3.05	1.21	16. 青春をエンジョイできている	3.68	1.00
	期待項目の平均	3.48		実感項目の平均	3.63	

n=133

各項目の前にある番号は質問番号

けるため」(4.38ポイント),「興味のある分野を深く掘り下げるため」(4.25ポイント)が高い項目として挙げられる。一方,「高い社会的地位を得るため」(2.63ポイント),「就職に有利なため」(2.83ポイント),「地域に根ざした教育方針に魅力を感じたため」(2.95ポイント)は低い項目であった。

次に,実感項目に関しては,「同じような目的を持った友人を得ることができている」(4.30ポイント),「希望している資格が取れそうだ」(4.18ポイント),「興味のある分野を深く掘り下げられている」(4.17ポイント)が高い項目として挙げられる。一方,「高い社会的地位を得ることができそうだ」(2.86ポイント),「地域に根ざした教育に魅力を感じている」(2.93ポイント)は低い項目であった。

このように20項目の比較において,高い項目や低い項目を挙げることができたが,全体的には,5段階評価で平均値が3.00ポイント以上の項目が多いことから,期待および実感の双方において高い評価を得ていることが明らかとなった。

Figure 2は,期待項目をY軸,実感項目をX軸にした散布図を,学部全体の満足・不満足構造として示したものである。まず,期待が高く実感が低い「不満足空間」には,②,⑭の2項目がプロットされた。次に,期待と実感がともに高い「満足空間」には,③,⑤,⑦,⑨,⑬,⑰,⑱,⑲の8項目がプロットされた。次に,期待と実感がともに低い「潜在的不満空間」には,①,④,⑥,⑩,⑪,⑬,⑮の7項目がプロットされた。最後に,期待は低く実感が高い「潜在的満足空間」には,⑧,⑫,⑳の3項目がプロットされた。

総合子ども学科

Table 2は,総合子ども学科の学生の期待と実感の各項目の平均点等を示したものである。

まず,期待項目に関しては,「資格を取るため」(4.69ポイント),「専門的な知識や技術を身につ

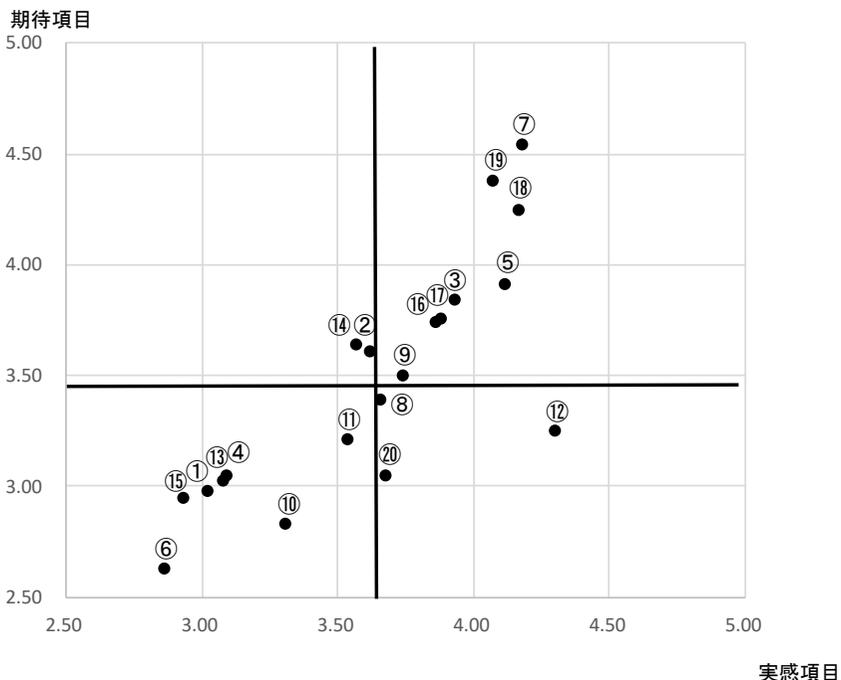


Figure 2 学生(学部全体)の満足・不満足構造

けるため」(4.40ポイント), 「興味のある分野を深く掘り下げるため」(4.24ポイント)が高い項目として挙げられる。一方, 「高い社会的地位を得るため」(2.55ポイント), 「就職後, 多くの収入・給与を得るため」(2.76ポイント)「就職に有利なため」(2.92ポイント), は低い項目であった。

次に, 実感項目に関しては, 「希望している資格が取れそうだ」(4.47ポイント), 「同じような目的を持った友人を得ることができている」(4.37ポイント), 「興味のある分野を深く掘り下げられている」(4.18ポイント)が高い項目として挙げられる。一方, 「高い社会的地位を得ることができそうだ」(2.96ポイント), 「就職後, 多くの収入・給与を得ることができそうだ」(2.98ポイント), 「社会に通用する肩書が得られそうだ」(2.98ポイント)は低い項目であった。

このように20項目の比較においては, 高い項目や低い項目を挙げる事ができた。また, 全体との比較において異なる項目としては, 期待項目の「就職後, 多くの収入・給与を得るため」が低い項目として, 実感項目の「就職後, 多くの収入・給与を得ることができそうだ」, 「社会に通用する肩書が得られそうだ」が低い項目として挙げられた。

Figure 3は, 期待項目をY軸, 実感項目をX軸にした散布図を, 総合子ども学科の満足・不満足構造として示したものである。まず, 期待が高く実感が低い「不満足空間」には, ②, ⑭の2項目がプロットされた。次に, 期待と実感がともに高い「満足空間」には, ③, ⑤, ⑦, ⑫, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲の8項目がプロットされた。次に, 期待と実感がともに低い「潜在的不満空間」には, ①, ④, ⑥, ⑨, ⑩, ⑬, ⑮の7項目がプロットされた。最後に, 期待は低く実感が高い「潜在的満足空間」には, ⑧, ⑪, ⑳の3項目がプロットされた。

Table 2 学生の期待—実感内容 (総合子ども学科)

プロット番号	期待項目	M	SD	実感項目	M	SD
①	1. 就職後, 多くの収入・給与を得るため	2.76	1.09	21. 就職後, 多くの収入・給与を得ることができそうだ	2.98	0.93
②	3. 文系と医系の連携である「文医融合」の学部の魅力を感じたため	3.66	1.45	2. 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている	3.37	1.15
③	5. 人生の視野を広げるため	3.82	1.07	11. 人生の視野を広げられている	4.04	0.87
④	6. 社会に通用する肩書きが必要なため	3.04	1.23	15. 社会に通用する肩書が得られそうだ	2.98	0.88
⑤	7. 自分に合った職業を探すため	3.78	1.18	12. 自分に合った職業を見つけれそうだ	4.22	0.74
⑥	8. 高い社会的地位を得るため	2.55	1.19	6. 高い社会的地位を得ることができそうだ	2.96	1.02
⑦	13. 資格を取るため	4.69	0.62	19. 希望している資格がとれそうだ	4.47	0.61
⑧	15. 知的好奇心を満たすため	3.41	1.22	5. 知的好奇心が満たされている	3.78	0.92
⑨	17. 医学部があり, 医学的な知識も学べるため	3.37	1.57	14. 医学部があり, 医学的な知識を学べている	3.20	1.04
⑩	19. 就職に有利なため	2.92	1.15	10. 就職に有利になりそうだ	3.41	0.91
⑪	20. 学科専門の知識だけでなく, 他学科の専門知識も学べるため	3.43	1.24	8. 学科専門の知識だけでなく, 他学科の専門知識も学べている	3.71	0.91
⑫	22. 同じように目的を持った友人を得るため	3.53	1.36	7. 同じような目的を持った友人を得ることができている	4.37	0.88
⑬	24. 就職後, より高い役職に就くため	3.06	1.27	17. 就職後, より高い役職に就くことができそうだ	3.14	0.68
⑭	25. 自分の才能を伸ばすため	3.63	1.02	1. 自分の才能を伸ばすことができている	3.59	0.84
⑮	26. 地域に根差した教育方針に魅力を感じたため	3.24	1.12	22. 地域に根差した教育に魅力を感じている	3.04	0.80
⑯	27. 幅広い教養を身につけるため	3.75	1.20	13. 幅広い教養を身につけられている	3.96	0.94
⑰	28. 得意とすることを追求するため	3.76	0.86	20. 得意とすることを追求できている	3.86	0.85
⑱	29. 興味のある分野を深く掘り下げるため	4.24	0.89	18. 興味のある分野を深く掘り下げられている	4.18	0.81
⑲	30. 専門的な知識や技術を身につけるため	4.40	0.76	3. 専門的な知識や技術を身につけられている	4.17	0.88
⑳	33. 青春をエンジョイするため	3.14	1.33	16. 青春をエンジョイできている	3.78	1.03
	期待項目の平均	3.51		実感項目の平均	3.66	

n=51

各項目の前にある番号は質問番号

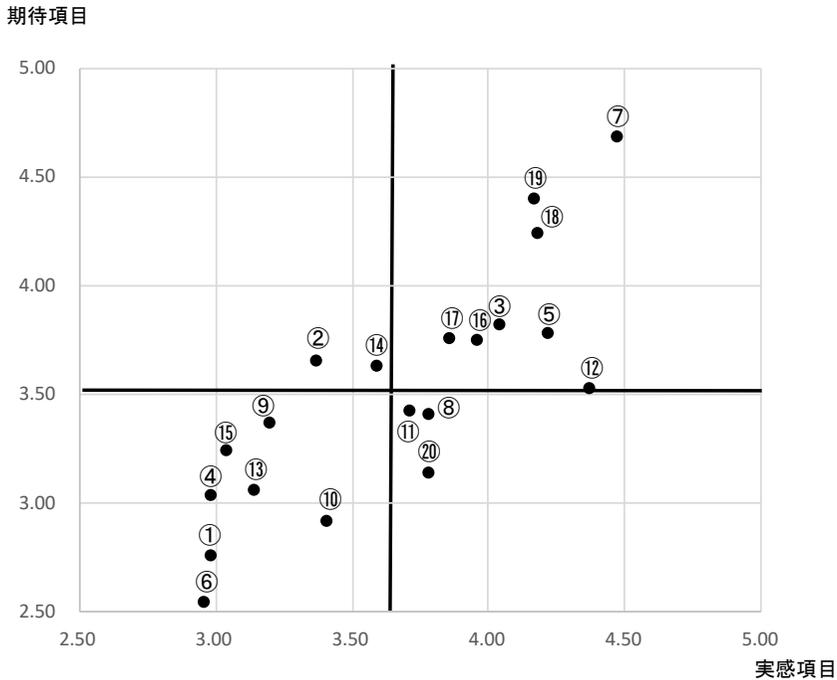


Figure 3 学生（総合子ども学科）の満足・不満足構造

スポーツ医科学科

Table 3は、スポーツ医科学科の学生の期待と実感の各項目の平均点等を示したものである。

まず、期待項目に関しては、「資格を取るため」(4.44ポイント)、「専門的な知識や技術を身につけるため」(4.37ポイント)、「興味のある分野を深く掘り下げるため」(4.27ポイント)が高い項目として挙げられる。一方、「高い社会的地位を得るため」(2.65ポイント)、「就職に有利なため」(2.74ポイント)、「地域に根ざした教育方針に魅力を感じたため」(2.74ポイント)は低い項目であった。

次に、実感項目に関しては、「同じような目的を持った友人を得ることができている」(4.26ポイント)、「興味のある分野を深く掘り下げられている」(4.16ポイント)、「自分に合った職業を見つけられそうだ」(4.06ポイント)が高い項目として挙げられる。一方、「高い社会的地位を得ることができそうだ」(2.77ポイント)、「地域に根ざした教育に魅力を感じている」(2.85ポイント)は低い項目であった。

このように20項目の比較においては、高い項目や低い項目を挙げる事ができた。また、全体との比較において異なる項目としては、実感項目の「自分に合った職業を見つけられそうだ」が高い項目として挙げられた。

Figure 4は、期待項目をY軸、実感項目をX軸にした散布図を、スポーツ医科学科の満足・不満足構造として示したものである。まず、期待が高く実感が低い「不満足空間」には、⑭の1項目がプロットされた。次に、期待と実感がともに高い「満足空間」には、②、③、⑤、⑦、⑨、⑯、⑰、⑱、⑲の9項目がプロットされた。次に、期待と実感がともに低い「潜在的不満空間」には、①、④、⑥、⑧、⑩、⑪、⑬、⑮の8項目がプロットされた。最後に、期待は低く実感が高い「潜在的満足空間」には、⑫の1項目がプロットされた。

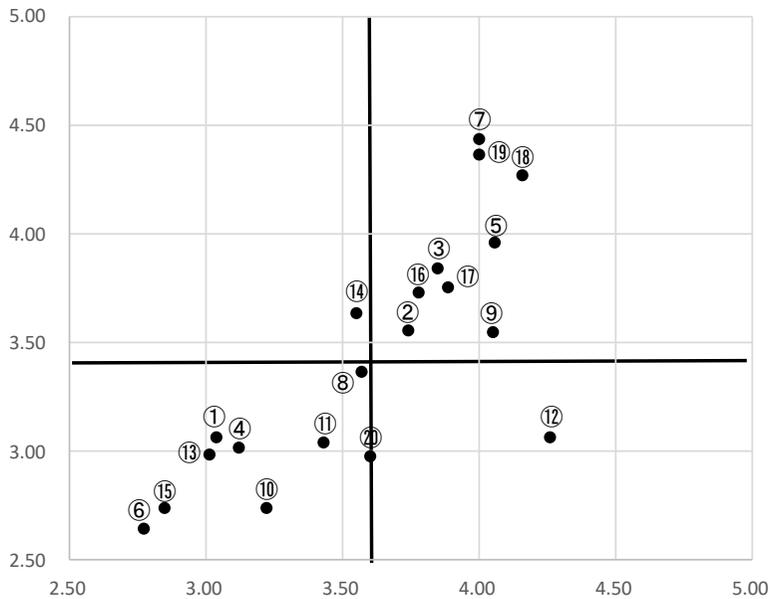
Table 3 学生の期待—実感内容（スポーツ医科学科）

プロット 番号	期待項目	M	SD	実感項目	M	SD
①	1. 就職後、多くの収入・給与を得るため	3.07	1.05	21. 就職後、多くの収入・給与を得ることができそう	3.04	0.73
②	3. 文系と医系の連携である「文医融合」の学部の魅力を感じたため	3.56	1.10	2. 文系と医系の連携である「文医融合」ならではの授業に魅力を感じている	3.74	1.02
③	5. 人生の視野を広げるため	3.84	0.99	11. 人生の視野を広げられている	3.85	0.80
④	6. 社会に通用する肩書きが必要なため	3.02	1.13	15. 社会に通用する肩書きが得られそう	3.12	0.74
⑤	7. 自分に合った職業を探すため	3.96	1.00	12. 自分に合った職業を見つけられそう	4.06	0.78
⑥	8. 高い社会的地位を得るため	2.65	0.98	6. 高い社会的地位を得ることができそう	2.77	0.85
⑦	13. 資格を取るため	4.44	0.69	19. 希望している資格がとれそう	4.00	0.79
⑧	15. 知的好奇心を満たすため	3.37	0.99	5. 知的好奇心が満たされている	3.57	0.89
⑨	17. 医学部があり、医学的な知識も学べるため	3.55	1.23	14. 医学部があり、医学的な知識を学べている	4.05	0.74
⑩	19. 就職に有利なため	2.74	1.08	10. 就職に有利になりそう	3.22	0.72
⑪	20. 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べるため	3.04	1.06	8. 学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べている	3.43	1.01
⑫	22. 同じように目的を持った友人を得るため	3.07	1.14	7. 同じような目的を持った友人を得ることができている	4.26	0.74
⑬	24. 就職後、より高い役職に就くため	2.99	1.02	17. 就職後、より高い役職に就くことができそう	3.01	0.81
⑭	25. 自分の才能を伸ばすため	3.64	1.00	1. 自分の才能を伸ばすことができている	3.55	0.74
⑮	26. 地域に根差した教育方針に魅力を感じたため	2.74	1.04	22. 地域に根差した教育に魅力を感じている	2.85	0.85
⑯	27. 幅広い教養を身につけるため	3.73	0.90	13. 幅広い教養を身につけられている	3.78	0.77
⑰	28. 得意とすることを追求するため	3.76	1.01	20. 得意とすることを追求できている	3.89	0.81
⑱	29. 興味のある分野を深く掘り下げるため	4.27	0.67	18. 興味のある分野を深く掘り下げられている	4.16	0.73
⑲	30. 専門的な知識や技術を身につけるため	4.37	0.60	3. 専門的な知識や技術を身につけられている	4.00	0.70
⑳	33. 青春をエンジョイするため	2.98	1.12	16. 青春をエンジョイできている	3.60	0.98
	期待項目の平均	3.44		実感項目の平均	3.60	

n=82

各項目の前にある番号は質問番号

期待項目



実感項目

Figure 4 学生（スポーツ医科学科）の満足・不満足構造

考 察

これまで、学生の入学前の期待と入学後の実感といった2種類の内容を測定した20項目の高・低の傾向を挙げることや、IPAの戦略フレームを援用し、実感項目（X軸）と期待項目（Y軸）の2軸による満足・不満足構造を示すことで、本研究における結果の特徴を明らかにしてきた。ここでは、これらの結果を踏まえ、今後の「文医融合」教育における暫定的な課題を考察していきたい。

まず、第1に、期待が高く実感が低い「Ⅰ. 不満足空間」にプロットされた項目についてみていきたい。この空間では、学部全体で「②文系と医系の連携である『文医融合』ならではの授業に魅力を感じている」、「⑭自分の才能を伸ばすことができている」の2項目がプロットされ、総合子ども学科で②、⑭の2項目が、スポーツ医科学科で⑭の1項目がプロットされていた。医学部との連携による授業は、専門科目として設定されている科目が多いことから、学年が上がるにつれて増えてくることを考えると、1年次での実感が低いことは止むを得ない評価であるかと思われる。また、自分の才能が伸びているという実感においても同様かと思われるため、不満足空間に位置付けられた項目であるが、学年が上がった段階で再度その対応を検討するといった、継続調査の結果を踏まえた上での対応が賢明かと考える。しかしながら、1年次においてもこれから学ぶ授業の内容について、履修ガイダンス等での丁寧な説明を施すことや、キャリアに関する話題を提供するなど、何らかの機会を設定することで学生の期待を高めることも可能かといえよう。

第2に、期待と実感がともに高い「Ⅱ. 満足空間」にプロットされた項目についてみていきたい。この空間では、学部全体で「③人生の視野を広げられている」、「⑤自分に合った職業を見つけられそうだ」、「⑦希望している資格がとれそうだ」、「⑨医学部があり、医学的な知識を学んでいる」、「⑯幅広い教養を身につけられている」、「⑰得意とすることを追求できている」、「⑱興味のある分野を深く掘り下げられている」、「⑲専門的な知識や技術を身につけられている」の8項目がプロットされ、総合子ども学科で③、⑤、⑦、⑯、⑰、⑱の7項目と「⑫同じような目的を持った友人を得ることができている」の学部全体とは異なった1項目の合計8項目が、スポーツ医科学科で③、⑤、⑦、⑨、⑯、⑰、⑱の8項目と「②文系と医系の連携である『文医融合』ならではの授業に魅力を感じている」の学部全体とは異なった1項目の合計9項目がプロットされていた。この空間にプロットされている項目内容については、その期待と実感を維持させる戦略が基本路線であるが、両学科で全体と異なった項目については、より一層の実感を得てもらうための対策を意識する必要があると思われる。総合子ども学科では、これから、学年が上がるにつれて数多くの実習を繰り返すことになるかと思われるが、そのような機会を通じてお互いの課題を共有し合い、その解決には個人で取り組むのももちろん、さらに仲間で協力し合うような学習環境の設定などが必要になるのではないかとと思われる。一方、スポーツ医科学科では、解剖実習をはじめとした医学部の授業を見学させてもらう際に医学部のある別キャンパスに出向く機会が設定されている。よって、そのキャンパスでの機会をその場で終わらせるのではなく、日頃のキャンパス内でも学びが充実するような学習環境の工夫が必要になると考える。

第3に、期待と実感がともに低い「Ⅲ. 潜在的不満空間」にプロットされた項目についてみていきたい。この空間では、学部全体で「①就職後、多くの収入・給与を得ることができそうだ」、「④社会に通用する肩書が得られそうだ」、「⑥高い社会的地位を得ることができそうだ」、「⑩就職に有利になりそうだ」、「⑪学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学んでいる」、「⑬就職後、

より高い役職に就くことができそうだ」, 「⑮地域に根差した教育に魅力を感じている」の7項目がプロットされ, 総合子ども学科で①, ④, ⑥, ⑩, ⑬, ⑮の6項目と「⑨医学部があり, 医学的な知識を学べている」の学部全体とは異なった1項目の合計7項目が, スポーツ医科学科で①, ④, ⑥, ⑩, ⑪, ⑬, ⑮の7項目と「⑧知的好奇心が満たされている」の学部全体とは異なった1項目の合計8項目がプロットされていた。ここでプロットされている多くの項目はもともと関心の薄い内容であることから, 学生にもあまり意識をさせずに教育活動を進めるといった低プライオリティ戦略を基本的にはとるべきであるといえよう。しかし, 両学科で全体と異なった項目については, 実感・期待ともに強化させるべき内容であると思われる。総合子ども学科では, 1年次においては医学部との連携した授業をまだ履修していないことから低い評価になっていると思われるが, 医学部との連携した授業が準備されていることを履修ガイダンス等で丁寧に説明しておくことは必要であるといえよう。また, スポーツ医科学科では, 学生の意欲に対して現段階での授業科目の内容レベルが低いことが想定される。専門的な授業が増えるにつれて知的好奇心を満たす実感は高まると想定されるが, 一方で, 1年次であっても一部専門的な内容に触れる機会(例えば, セミナール形式の演習科目での展開の工夫)なども検討する必要があるといえよう。

第4に, 期待が低く実感が高い「Ⅳ. 潜在的満足空間」にプロットされた項目についてみていきたい。この空間では, 学部全体で「⑧知的好奇心が満たされている」, 「⑫同じような目的を持った友人を得ることができている」, 「⑳青春をエンジョイできている」の3項目がプロットされ, 総合子ども学科で⑧, ⑳の2項目と「⑪学科専門の知識だけでなく, 他学科の専門知識も学べている」の学部全体とは異なった1項目の合計3項目が, スポーツ医科学科で⑫の1項目がプロットされていた。この空間にプロットされている項目は, 期待を高め顕在的満足を得てもらう取り組みが基本的な対策として求められるが, 一方で, 学生の期待が低いにもかかわらず, 教員(大学)が過剰な取り組みを行っている内容としても捉えることができる。しかしながら, この空間でプロットされている項目から読み取れる内容として, 学生同士の交流が活発なことは, 学びの環境として決して悪いことではない。さらに, 両学科で比較した場合, この空間においては, 全く異なる項目がプロットされていることから, 各学科での特徴を踏まえた対応策を検討する必要があるといえよう。

今後の課題

本研究では, IPAを用いて学生による新学部への期待と実感の評価を行った。その結果, 期待と実感ともに高い「Ⅱ. 満足空間」にプロットされた項目は8項目(総合子ども学科8項目, スポーツ医科学科9項目)と多くの項目を確認することができた。一方で, 期待は高いが実感は低い「Ⅰ. 不満足空間」にプロットされた項目は2項目(総合子ども学科2項目, スポーツ医科学科1項目)と数は少ないものの確認することができた。この不満足空間にプロットされた項目内容については, 一般的には早急な対策が講じられる必要があるが, 医学部との連携した授業科目が専門科目として

Table 4 全体および両学科別にみる満足—不満足 of 各項目プロット状況

	(Ⅰ) 不満足空間	(Ⅱ) 満足空間	(Ⅲ) 潜在的満足空間	(Ⅳ) 潜在的満足空間
学部全体	②, ⑭	③, ⑤, ⑦, ⑨, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲	①, ④, ⑥, ⑩, ⑪, ⑬, ⑮	⑧, ⑫, ⑳
総合子ども学科	②, ⑭	③, ⑤, ⑦, ⑫, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲	①, ④, ⑥, ⑨, ⑩, ⑬, ⑮	⑧, ⑪, ⑳
スポーツ医科学科	⑭	②, ③, ⑤, ⑦, ⑨, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲	①, ④, ⑥, ⑧, ⑩, ⑪, ⑬, ⑮	⑫

多く設定されていることや、学生が自身の才能を伸ばしているという実感は、学年が上がるにつれて醸成されるものと考えられることから、これらの動向を継続的に測定する調査の必要性を指摘することができよう。

また、期待は低いが実感は高い「Ⅳ. 潜在的満足空間」にプロットされた項目は3項目（総合子ども学科3項目、スポーツ医科学科1項目）を確認することができた。一方で、期待と実感ともに低い「Ⅲ. 潜在的不満足空間」にプロットされた項目は7項目（総合子ども学科7項目、スポーツ医科学科8項目）と多くの項目を確認することができた。この潜在的不満足空間にプロットされた項目は、その多くが卒業後の社会的地位獲得などに関する項目であり、1年次の段階としてはそこまで意識した対応を講じる必要がないと考える。しかし、総合子ども学科では「⑨医学部があり、医学的な知識を学んでいる」という項目が、スポーツ医科学科では「⑧知的好奇心が満たされている」という項目が独自にプロットされており、これらの内容については、両学科で異なる対応が必要であるといえよう。

以上のような結果を勘案すれば、学部コンセプトである「文医融合」教育の実現に向けては、継続的な調査の必要性、つまり、学科別で異なる取り組みを経ての再検証が今後の課題として認識できよう。

さらに、IPAは、適用領域が広がっているとはいえ、本研究では、その戦略フレームをそのまま援用した分析を施した。よって、入学動機をベースとした「文医融合」教育の課題抽出という本研究に合わせた戦略フレームの理論的な精緻化は、今後に残された課題と考える。

文 献

- Azzopardi, E. & Nash, R. (2013) A critical evaluation of importance-performance analysis. *Tourism Management*, 35: 222-233.
- Abalo, J., Varela, J., & Manzano, V. (2007) Importance values for importance-performance analysis: A formula for spreading out values derived from preference rankings. *Journal of Business Research*, 60: 115-121.
- 中央教育審議会大学分科会将来構想部会 (2017) 今後の高等教育の将来像に提示に向けた論点整理.
- Coghlan, A. (2012) Facilitating reef tourism management through an innovative importance-performance analysis method. *Tourism Management*. 33: 767-775.
- Dwyer, L., Knezevic Celbar, L., Edwards, D. & Mihalic, T. (2012) Fashioning a destination tourism future: The case of Slovenia. *Tourism Management*, 33: 305-316.
- 淵上克義 (1984) 進学志望の意思決定過程に関する研究. *教育心理学研究*, 32 (1) : 59-63.
- 古市裕一 (1993) 大学生の大学進学動機と価値意識. *進路指導研究*, 14: 1-7.
- 後藤宗理 (2003) 大学生における進学動機・自己意識・社会意識：専攻分野の比較. 名古屋市立大学人文社会学部研究紀要, 15: 1-18.
- Joseph, M., Allbright, D., Stone, G., Sekhon, Y., & Tinson, J. (2005) Importance-performance analysis of UK and bank customer perceptions of service delivery technologies. *International Journal of Bank Marketing*, 25 (5) : 397-413.
- 栗山直子・上市秀雄・齊藤貴浩・楠見孝 (2001) 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推. *教育心理学研究*, 49: 409-416.
- Levenburg, N. M., & Magal, S. R. (2005) Applying importance-performance analysis to evaluate e-business strategies among firms. *E-Service Journal*, 3 (3) : 29-48.
- Martilla, J. A. & Jarnes, J. C. (1977) Importance-performance analysis. *Journal of Marketing*, 41 (1) : 77-79.
- 松田侑子・濱田祥子・設楽紗英子 (2014) 保育系学生における大学適応：進学動機、キャリアの観点から. 弘前

- 大学教育学部紀要, 112: 81-88.
- 文部科学省 (2018) 平成30年度学校基本調査. http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1407849.htm (閲覧日: 2019.2.8).
- 中村 真・薊 理津子 (2016) 大学適応に影響する要因としての入学動機に関する基礎的検討. 江戸川大学紀要, 27: 301-308.
- Nale, R. D., Rauch, D. A., Wathen, S. A. & Barr, P. B. (2000) An exploratory look at the use of importance-performance analysis as a curricular assessment tool in a school of business. *Journal of Workplace Learning*, 12 (4) : 139-145.
- O'Neill, M. A., & Palmer, A. (2004) Importance-performance analysis: A useful tool for directing continuous quality improvement in higher education. *Quality Assurance in Education*, 12 (1) : 39-52.
- Skok, W., Kophamel, A., & Richardson, I. (2001) Diagnosing information systems success: Importance-performance maps in the health club industry. *Information and Management*, 38: 409-419.
- Tontini, G. & Silveira, A. (2007) Identification of satisfaction attributes using competitive analysis of the improvement gap. *International Journal of Operations and Production Management*, 27 (5) : 482-500.
- Van Ryzin, G. G., & Immerwahr, S. (2007) Research note: Importance performance analysis of citizen satisfaction surveys. *Public Administration*, 85 (1) : 215-226.
- 山下秋二 (2005) 図解スポーツマネジメント. 大修館書店: 東京.
- Yeo, A. Y. C. (2003) Examining a Singapore bank's competitive superiority using importance-performance analysis. *Journal of American Academy of Business*, 3 (1/2) : 155-161.

付 記

本研究は、平成30年度久留米大学副学長裁量教育研究支援「新学部における教育評価システムの構築～「文医融合」の学習環境の実質化に向けて～」の調査結果の一部を用いたものである。

(2019.3.27. 受理)